

内陸アフリカの論理 —生態史的背景—

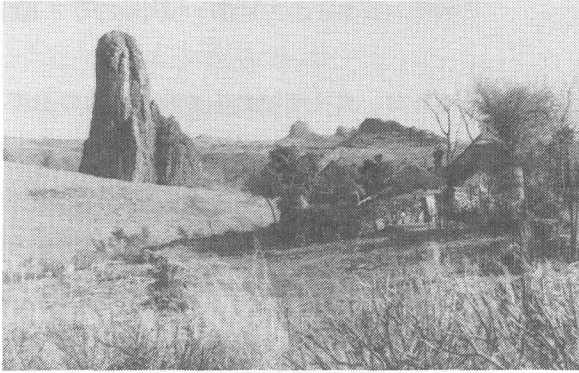
市川光雄

インド洋沿岸のスワヒリ地域やサハラ砂漠南縁のサヘルは、大文明であるイスラームの影響が非常に強い地域で、イスラーム世界が築いた世界的ネットワーク、一つはアフロ・ユーラシアの内陸乾燥地域を結ぶネットワーク、もう一つはインド洋を中心とする海洋に広がったネットワークであるが、それらの辺縁部に位置するアフリカという位置づけが日野さんと嶋田さんによってされたと思う。それに対して内陸部のアフリカは、そうした大文明という外からの影響が少ない地域の話になる。特に内陸部の代表的な住民であるバントゥの世界の生態史的背景から、アフリカの固有世界の特徴を抽出していきたい。

バントゥ語を話す住民の分布は、サハラ以南のアフリカの約3分の1以上に及んでおり、この地域では最大の集団である。この社会の特徴を一言で言えば、「小世界の林立空間」と「社会的な流動性」であると言えるだろう。彼らの社会は、離散的な社会であり、常に分散し続けてきた。そして、この社会が常に多民族状況の中に置かれてきたことも考えねばならない。スワヒリについて、日野さんから言葉の意味やバウンダリーが文脈によって変わるという流動性が指摘されているが、バントゥの人達が繰り返してきた移動を考えれば、そのような流動的な特徴もよくわかる。すなわち「移動と分散」がこの世界を特徴づける概念であり、そしてそれは少なくとも数千年という長い歴史を持ち、生態史的背景を持つのだということについて話してみたい。

アフリカでは、植生、あるいは環境区分をもとにして、その地域区分を考えることが多い。例に内陸アフリカを高谷さんが言う「生態論理が卓越する地域」として、そこで世界単位と考えようとする場合、やはりその生態区分が土台になると考えられる。そこで、まずアフリカの生態区分を簡単に見ておきたい。アフリカでは、西アフリカだけを見れば、細い帯状に生態区分が展開しているということになるだろうが、南の方まで視野に入れれば、やはりギニア湾を中心に同心円的に広がった生態区分を考えるのが妥当であろう。アフリカの気候あるいは植生区分は、一番湿潤なギニア湾の沿岸部を中心に、そこから遠ざかるにつれて乾燥化している。サハラと大西洋に二つの高気圧があり、そこから吹き出す風がぶつかる場所、つまり熱帯収束帯でよく雨が降る。このような熱帯収束帯が南北に移動することによって、乾期と雨期が交代して訪れる。この湿潤乾燥系列に沿って同心円状に植生が展開しているというわけである。

大陸の中心部には、アマゾンや東南アジアに並ぶ立派な熱帯雨林があり、世界の熱帯雨林の約5分の1を占めている。ここは、現在ではプランティン、タロ、アジア産のヤム、新大陸起



マンダラ (Mandala) 山塊ルムシキ (Roumsiki) 付近
(カメルーン北部)

源のキャッサバ等の根菜・果実類を栽培する地域である。しかし森林地帯には草地が少なくツェツェバエの生息地域でもあるので、牧畜は昔からあまり盛んではなかった。

その森林地帯をとり巻くようにサバンナ、ウッドランドがあり、特に東南部のアフリカではミオンボと称されるジャケツイバラ亜科の美しい疎林になっている。西部ではミオンボがなくなり、かわりに

シクンシ科のコンプレトゥムなどの喬木がいわゆるギニア・サバンナを形成している。年間降雨量が1000～1500mmあり、ここもツェツェバエの分布地域に入るため、牧畜はあまり盛んではなかった。トウモロコシやシコクビエ等の比較的湿潤を好む雑穀類が栽培されている。

その外側はサバンナ的な景観になり、イネ科の草本が繁茂している。年間雨量は800～1000mmでツェツェバエの分布限界になり、より乾燥した地域では牧畜に絶好の環境となる。農耕は北部のより乾燥したところでは、トウジンビエ、フォニオのように、乾燥に強い作物を栽培している。特に西アフリカからスーダン共和国の南にかけての、サハラの南側に位置するスーダンと呼ばれる地域は、スーダン農耕文化と呼ばれるアフリカ独自の農耕文化の発祥地と言われている。それより更に北はオアシスが点在するサハラ砂漠となる。

このようにアフリカには明瞭な生態区分があり、その自然条件に適応した生活様式が古くから続いている。そこでは一見、生態に応じた固有世界(内世界)が形成されているかのように見える。しかし、実際にはアフリカの環境や人間の営みは、過去に何度も激しい変動に見舞われている。むしろそういう変動を通して、今日我々が目にするアフリカの特徴が形成されたと考えたい。特にサハラ以南のバントゥ社会の特徴である「社会的な流動性」は、環境の変動とその過程で起きた「移動・分散」を通して形成されたと考えている。

アフリカの先史時代については、旧石器、新石器という従来の分類ではうまくいかない。アフリカでは、いわゆる新石器的な文化要素(磨製石器と土器)が出てきても農耕が始まっていないという、日本の縄文時代にも似た現象がある。それゆえに後期石器時代、前期石器時代と分けられているが、アフリカ的な特徴は後期石器時代から鉄器時代の初めにかけて形成されたのではないかというのが本日の話である。アフリカの後期石器時代は、第四紀更新世の水河期

の終わり頃に始まるのであるが、アフリカ大陸自体が氷河に覆われたことはなかった。しかしそれでも平均気温は約5～6度ほど低下したと言われている。ユーラシアで氷河が発達した寒冷期は、アフリカは乾燥期であったというのが最近の見解である。しかも後氷期に入ってから、アフリカではサハラに居座っている亜熱帯高気圧の勢力の強弱によって、乾燥期と湿潤期が繰り返されていたことが最近、東京都立大学の門村さんなどの研究からわかってきた。

いまから1万8千年前、ウルム氷期の最後の乾燥期がピークを迎えるが、その頃には、現在では熱帯雨林で覆われている大半の地域がサバンナ化し、森林は僅かにギニヤ湾沿岸部とカメルーン沿岸部、ザイール東部に点在するのみとなっていた。しかし、その後は湿潤化し、森林が拡大してくる。約8千年前の湿潤期のピークには、セネガル南部のカザマンス川まで森林が拡大していた。森林面積はいまの約2倍にも拡大したと言われている。サハラ砂漠にも現在の3～4倍の降雨量があり、ステップ化やサバンナ化した。いわゆる「緑のサハラ」が到来した時代である。その後も、何回かの乾湿の交代はあったが、相対的には乾燥化してくる。つまり再び森林が後退し、サハラは砂漠化してきた。こうした環境変遷は、当然ながらアフリカの先史にも大きな影響を与えた。現在のサハラでは、一部のオアシスを除いては人間の居住に適さない所だが、かつてはステップやサバンナに覆われ、野生動物の狩猟や、時代が少し下れば牧畜が行われていたことも明らかになっている。

約5、6千年前から再び気候の乾燥化が厳しくなると、南の疎開林はサバンナ化し、サハラの南にいた農耕民達も南下を始める。こうした人口移動とサバンナ化によって、多くのものがサハラ以南のアフリカにもたらされた。更にそれから千～2千年遅れて、熱帯雨林がサバンナ化してくるのであるが、こうしたことによってバントゥ系の移動の条件が整えられてきたと考えられる。特に西アフリカでは、気候帯が東西に細いバンドとなって分布しているため、わずかな気候変動が人びとの生活に大きな影響を与えた。年間雨量が200～800mmのサヘルでは、降雨量の変化にともなって、ツェツェバエの分布限界が北上と南下を繰り返し、甚だしいときは牧畜可能地域が500～1000kmも南北に移動したようだ。それが広範な人口移動や、民族間の接触や衝突の原因になったと言われている。

このような環境変遷の中で、アフリカ的な農耕であるスーダン農耕文化が成立した。スーダン農耕文化というのは、中尾佐助先生によると、世界の四大農業文化の一つで、ソルガム、トウジンビエ、シコクビエという雑穀類、あるいはゴマ等の油料作物を主な栽培作物とするものである。アフリカ起源の作物を主体にする点、耕作に犁ではなくて鋤を用いる点で非常にユニークな農耕文化とされている。このアフリカ独自の農耕の起源については、様々な説がある。



モコロ (Mokolo) 付近の農家
(カメルーン北部)

イギリス人のアフリカ史家のフェイジは、技術そのものは湿潤期にサバンナやステップで繋がっていたエジプトから、ナイル川を経てスーダン地方に移ったと考えている。古川さんも、北アフリカからサハラを通して農耕が伝わったと言われたが、人類学者のマードックや中央アフリカ史家のバーミングムなどは、そうではなくて、アフリカにおける独立起源説の立場をとっている。私も、このスーダン

地方には独立して農耕文化を生み出すだけの条件が、十分に整っていたと考えている。いずれにしても、熱帯アフリカでは中東のように麦類を栽培することができないし、作物、農法ともに、独自のスーダン農耕文化がアフリカの中で発達したことは間違いないだろう。

スーダン地方はいまでは乾燥したサバンナになっているが、最終的に乾燥したのは、7、8千年前以降の完新世に入ってからのことである。つまり、この地域では乾燥化の歴史が非常に浅い。乾燥気候が長く続いたところでは乾燥に対する適応として多肉植物が発達してくるが、ここではあまりそれが発達せず、代わりに野生のイネ科の草本が非常に繁茂している。その中には食用となる種子をつけるものも多く、現在でも50~60種ほどの野生種子が採集されているという。こうした野生の有用植物の中から、スーダン農耕文化の雑穀類が栽培化されたと考えていいだろう。

いまから8千年前の湿潤期は、ところによっては湖の水位が数10mも上がったと言われている。特にニジェール川からナイル川にかけての中部アフリカでは、河川や湖沼環境が非常に発達し、水産資源を背景にした独自の文化が発達した。細石器と磨製石器、骨製のモリ土器などの新しい技術を持つ文化である。特に魚を煮炊きする土器が出土したことから、中部アフリカから東アフリカにかけての考古学を研究した人は、これを「フィッシュ・シチュー・リボルーション」と言っている。魚を煮ることを可能にした文化革命だというわけである。この地域では日本と同じように、土器が出たからといって必ずしも農耕が行われたというわけではない。だが少なくとも豊富な水産資源と、野生植物の集約的な利用を背景にして、半定住的な生活くらいは営まれていたのではないかとされている。

しかし、これ以降、気候はさらに乾燥化し、資源利用の集約化が一層必要になってくる。お

そらく最初の農耕はこのような状況で始まったのだろう。スーダン農耕文化の作物の殆どの起源地は、エチオピア起源のエンセテや森林の辺縁部で栽培化されたヤムを除けば、この湖沼文化の分布域の中にある。紀元前7000～8000年頃にピークを迎えた湖沼文化が、スーダン農耕文化の母体になった可能性は十分にある。しかしアフリカでは、農耕に関する最古の考古学的証拠は意外に新しく、紀元前2000年紀、いまから3千～4千年程前に、モーリタニアとガーナの北部で出ている。もっとも、アフリカ起源とされているソルガムが、紀元前2000年にはインドで、紀元前2500年にはアラビア半島から出ている。こうしたことから考えると、起源地のアフリカでは、紀元前3000年代にはソルガムが栽培されていたと考えた方がいい。いずれにしてもアフリカのサバンナ的なスーダン農耕文化が、完新世初期の環境変動の過程で生まれたことに注目しておきたい。

言語年代学で、農耕文化に関わるような語彙がどの程度共通して存在し、どの程度の年代まで遡れるかということ推定した人がいるが、それによると、既に紀元前3000年までには、北緯5度以北のアフリカの大半の地域で農耕が行われていたと言う。これには、サハラの大乾燥化による人々の南下が背景にあったと考えられる。さらにこの後紀元前後から、急速に南方の森林地帯、あるいは東アフリカや南アフリカのウッドランドやサバンナにも農耕が広がっていくが、その担い手となったのがバントゥ系の人々だった。

バントゥ系の人々は、数百の言語集団からなり、それらがさらに細かく分ければ、千～2千にも分けられるという。しかし、互いに非常に近縁な言語である。ということは、これらの言語は、比較的最近になって分かれたことを意味している。現在では中央アフリカから東、南アフリカまで非常に広大な地域に分布しており、ナイジェリアのビアフラ地方からケニア、タンザニアの東海岸までの、人口の90%以上をバントゥ系住民が占めている。その中でもカメルーン西部からナイジェリアにかけての地域が、バントゥの言葉がいちばん多様化しており、おそらくここが起源地だろうと言われている。バントゥの人々は、紀元5世紀までには東及び南アフリカの海岸部にまで達していた。仮に起源地をカメルーン西部とし、紀元前1000年頃に、移動を始めたとする、約1500年間に直線距離にして約4000kmの距離を移動したことになる。年間では平均2kmから3kmずつ分布を拡大していったということである。これは、焼き畑をしながらの移動であったことを考えれば、非常に驚異的なスピードと言える。マードックはこのような短期間での急速な分布域の拡大は、マホメット以後のアラブの拡張にも匹敵する出来事だと言っている。

その移動の生態学的な背景としては、やはり気候の大乾燥化ということがあったのであろう。

約5000年前から気候の乾燥化は非常に著しくなり、その影響が3～4千年前になると森林地帯にまで達し、森林の後退、サバンナ化が進行してくる。その結果、熱帯雨林であったコンゴ盆地の周縁部を囲むようにして、コンゴ・クレセントと呼ばれる三日月状のサバンナや疎開林地帯が形成された。バントゥ系の祖先は、ギニア・サバンナに位置していた故郷のカメルーン西部から、乾燥によって生じたよく似た環境を伝い、まずは東方に、部分的には森林の中をかすめながら分布を広げ、紀元前3世紀にはビクトリア湖の周辺に達したと言われている。ここには、バントゥ的な特徴を持つウレウェという土器が出土している。こうした東への移動とは別に、海岸部に沿って南下したグループがある。この西部バントゥの流れも紀元前3世紀頃までには、第二次バントゥ拡散の中心地になったザイル南部のサバンナに到達した。さらに紀元後1世紀には、西部バントゥの別のグループがガボンを経由して、コンゴ盆地の森林地帯の中にまで足を踏み入れていたという考古学的な証拠も出ている。

このような激しい移動の後を辿ると、彼らが何故そんなに移動するのかという疑問が生じてくる。単に耕地不足や人口圧という適応的な要因だけでは説明がつかず、「移動の習性」があったとしか思えない。しかもその移動の仕方は、村の人口が膨張すると、その隣に新しい村を作るような、徐々に分布を広げていくようなものではない。ホップ・スコッチという石けり遊びのように、フロンティアの一番最前線の村を後方から来た人達が飛び越えて行くような移住の仕方だったと言われている。パイオニアの移住は、どの地域でも、風のように処女地を駆け抜けていくものかもしれないが、このような移動の伝統がバントゥ社会にはあると考えたい。

このようにして形成されたバントゥ世界の特徴の一つが「小世界の林立空間」である。それは、人口が増えると分裂して新しい土地へ行くという、単細胞分裂型の社会が林立する世界である。人口の増加は普通、政治組織的な高度化を促すものであるが、バントゥはそうではなくて、移動による分散の道をとったということであろう。

特にここで注目したいのが、バントゥ系住民の森林地帯への移住である。彼らは、現在ではコンゴ盆地のほぼ全域をカバーし、この地域の人口の90%以上を占めているが、これ程までに森林地帯の移住に成功したのは、言うまでもなく森林地帯に適応した農耕文化を採用したからである。特に、森林の湿潤気候に適応した作物と、伐採のための鉄器を手に入れたことが大きい。元々バントゥの人達がカメルーン西部で栽培していたのは、サバンナ起源の雑穀や豆、この地域で栽培化されたであろうギニア・ヤム、あるいはもう少し南の方にあるアブラヤシであった。アブラヤシを除けば、この中に多湿な熱帯雨林の栽培に適したものはないと言える。ヤムも元来は乾期のある所でよく育つ作物である。つまり、乾期に備えて栄養を地下に蓄える

植物なので、年中多湿な森林地帯のヤムは根が非常に小さく、しかも多年生のものが多い。ヤムの種類は多くても、食用になるものは少ないというわけである。ヤムを栽培するのにも、光がよくあたる疎開林などの、より開けた所の方が適していると言われている。

現在中央アフリカの森林地帯で広く栽培されているのは、バナナ、プランティン、キャッサバだが、これらは元々湿潤熱帯から生まれた作物である。その上、単位面積あたりの収量はヤムよりずっと多く、数倍から十倍に達すると言われている。キャッサバはコロンブス以降に新大陸から伝わったものなので、バントゥの森林地域への移住には、とりあえず関係がない。一方、バナナはインド洋あるいはアラビア半島経由で、紀元1世紀には東アフリカに伝わっていた。実際にはこれ以前に赤道アフリカに入ったことも十分考えられる。バントゥが最初に森林の中に入った時期にすでにバナナを持っていたかどうかはともかく、それ以降、熱帯雨林の中にかくも広範に分布を広げたのには、やはりプランティンの導入が大きな役割を果たしたと考えられる。生育により光を必要とするヤムに比べ、プランティンは少々日陰のある方がいい。また、木を残しておいた方がよく、中小木を刈り払うだけで農耕が可能だった。しかもバナナは原生林を伐り拓いた畑の方がよく育ち収量が多い。森林内のパイオニア的な集落では、畑のあちこちに大木を残しながら、原生林を少しずつ拓いていったと考えられる。

現在でも新しく移住した村の土地利用を見ると、バナナ畑の大半は原生林の中に拓かれ、二次林を開墾した畑はキャッサバ等の栽培に使われることが多い。やがて一通り周囲の森に手がつけられ、新たに移住する土地がだんだんなくなってくる。つまり環境が密度化してくると、環境利用のエラボレーションとして二次林利用の持続的なシステムができてくる。現在のコンゴ盆地の農民は、大半がこうした二次林利用のシステムを持っているが、初期の移動と拡散の時代には、おそらく原生林の中に次々と焼き畑を作って移動して行ったのだろうと考えている。

森林地帯の移動を容易にした要因の一つに鉄器がある。鉄器は伐採において抜群の威力を発揮する。サハラ以南のアフリカでは青銅器や銅器の時代はほとんどなく、ほとんどの地域では石器時代から直接鉄器時代に入った。紀元前5世紀頃に、ナイジェリアのジョス高地などには既に鉄器があったと言われている。この鉄器起源にも様々な説があるが、いずれにせよ、紀元前3世紀頃までにバントゥの人たちは既に鉄器を持っており、紀元2～4世紀頃には森林の中にまで入っていた。それから急速に鉄器は東南部アフリカとコンゴ盆地の中に入っていったが、おそらくその担い手となったのはバントゥ系の人達だったのである。

アフリカの生態的な環境は、紀元前1万数千年前の後期石器時代から紀元前後までの間に非常に大きな変動を迎えた。その中で独自の農耕文化が形成される等、多くのアフリカ的な特徴

が形成された。なかでも特に環境変動によって人々が非常に広範な移動をしたことに注目したい。サハラはアフリカ史を通じて重要な交通路であったが、とりわけ「緑のサハラ」が到来した湿潤期には、北アフリカからサハラ以南までは、ほぼ連続した居住空間が広がっていたと思う。そしてやがて始まったサハラ及びサヘルの乾燥化によって人々が南下し、サバンナ起源の穀物や家畜等が赤道アフリカの周縁部まで入ってくる。こうした北からの人口移動に押されるように、あるいは中央アフリカの森林地帯のサバンナ化に引っ張られるようにして、バントゥ系の人々の移動が始まったのではないか。

このような移動によって、異なる技術や生活様式を持つ人々が各地で共存することになった。東アフリカに進出したバントゥの人々は、そこで北から南下してきたクシ系の人々と接触し、エチオピア起源の作物、特にシコクビエを取り入れる。あるいは家畜を取り入れていった。中央アフリカの森林地帯では、その先住民であるピグミーと共生的な関係を形成する。南アフリカでは、先住民のコイサン系ブッシュマンとある種の主従関係を形成しながら共存している。移動の先々で新しい関係、出会いを経験しながら、バントゥの人々は分布を拡大していったのであろう。



プスの市場（カメルーン北部）

紀元前後から1000年頃迄のアフリカの地域社会は、相互に交流を持ちながらも、互いに独立し、狩猟、採集、牧畜、農耕という異なる技術や生活様式を持つ様々な社会が共存していた時代ではないか。アフリカでは今日においても、そういう多文化の共存関係が形を変えて維持されている。内陸アフリカの特徴は、多様なものが共存し、それがしかも国家のような超越的な枠組みを介したのものでもなく、また強大な文明という非常に強固な枠組みによって、内部の社会が同質化されている社会でもない。異質の社会がそのままでも住み分けている社会と言えるだろう。